CORE Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

要通訳裁判員裁判における法廷通訳人の疲労とストレスについて

Fatigue and Stress of Court Interpreters in Lay Judge Trials

水　野　真木子　　中　村　幸　子
Makiko MIZUNO　　Sachiko NAKAMURA

1．はじめに

わが国では司法改革の一環として2009年に裁判員制度が導入された。そして，外国人が被告人になるケースも徐々に増え，全国各地で要通訳裁判員裁判が行われてきた。従来型の裁判の書証中心主義とは異なり，口頭主義が徹底している裁判員裁判では，そこで行われる言葉のやり取りが，裁判員の判断に影響を及ぼす。日本語を解さない外国人が被告人になった場合，裁判でうまくコミュニケーションできなければ，公正な司法への権利は侵害されることになる。そこで，これまで以上に法廷通訳人の重要性が増し，通訳のあり方をめぐって様々な議論がある。

従来型の裁判は１回の開廷時間が１時間前後であるのに対し，裁判員裁判は集中審理のため，３日くらいで結審するという事情があり，１日の開廷時間が6時間程度になることも普通である。そのため，従来型の裁判のように通訳人が１人で行うには無理があるというのが一般的な通訳者の考え方である。しかし，大阪でのポーランド語の事件（2009年10月）や新潟でのロシア語の事件（2010年３月）など，実際の現場では通訳人が１人しか任命されないケースも多く，裁判所も，通訳人に対して適当に休憩を取らせておけば，１人体制でも構わないという考え方に傾きつつあるという。

ところが，長時間通訳を続けると，通訳者の疲労やストレスが蓄積し，それによって誤訳の可能性が高まるということが，同時通訳を中心とする会議通訳に関する研究で明らかになっている。本稿では，裁判員裁判という状況の中で通訳人が長時間通訳を行うことで，通訳プロダクトにどのような影響が生じるかという点を中心に，先行研究や模擬法廷から得られたデータに基づき，法廷通訳人の疲労とストレスについて論じる。

2．先行研究

通訳者の疲労やストレスというテーマは，長年通訳者たちの間で，そして通訳を利用する側の人々によって話題として取り上げられてきた。そして，一般的理解として，通訳という作業は「長時間にわたり，最大限の注意と集中を要する大変きつい仕事である」（Kurz, 2003）とされてきた。もちろん，通訳業務におけるコーピング（ストレスを評価し対処しようとすること）の方法は，経験豊富なプロの通訳者と初心者の間では異なって

いるし，ストレスを感じる程度も，その人の性格などによる個人差がある（Kurz, 2003）が，通訳という仕事には必ずストレスが伴うものであることは，多くの文献が指摘している。

通訳者の疲労とその大きな原因であるストレスについては，近年まで「暗黙の了解（tacit assumption）」の範囲内で語られるに留まっていた（Kurz, 2003）が，1990年代後半から，次々と実証的な研究が行われるようになり，その実態が科学的根拠に基づいて示されるようになってきた。まず，ストレスとは何かという点についてであるが，Riccardi, et al.（1998）が，通訳者の心理的負担に関する研究の中で「（ストレスとは）環境が求めるものが，それらに対処するために自分が利用できるリソースを明らかに超えるものであると人が感じるときに生じるものである」と述べている。通訳という仕事が非常にストレスを感じる作業であるということは，様々な認知プロセスに伴う瞳孔の拡大の度合いを調べる研究からも明らかになっている（Tommola and Hyona, 1990 in Riccardi, et al. 1998；Hyona, et al. 1995）。

これまでの通訳者の疲労やストレス，通訳の質についての研究は，主として，環境，生理，心理，そして通訳の質（エラー）といった4つのパラメーターを使用して行われてきた。まず環境的な側面であるが，通訳者にとって最適の気温，湿度，二酸化炭素レベルなど，同時通訳ブースの環境に関わる研究がある。AIIC（International Association of Conference Interpreters）［国際会議通訳者協会］の努力によって，同時通訳ブースの設計に改善が見られたが，それ以降の研究結果からは，現実にはまだまだ環境的に適切でないブースが多いことがわかったという（Kurz, 2003）。また，音響的要素も通訳者のストレスと疲労に大きく関わっており，通訳プロダクトの正確性に影響を及ぼすものであることを明らかにした研究もある（Gerver, 1974 in Vidal, 1997）。

生理学的な研究としては，その代表的なものがMoser-mercer, et al（1998）である。この研究では，著者たちは，経験豊富な会議通訳者たちを被験者にし，本人たちにとって通訳の質の劣化が許容範囲を超えるまで同時通訳を続けさせ，そのプロセスについて，生理学的および心理的な指標を用い，ストレスと疲労のレベルを分析するという実験を行った。生理学的実験として，ストレスが加わると分泌が促されるコルチゾールや免疫グロブリンの増減を，一定時間ごとの唾液採取によって調べたが，通訳開始前から30分後までの間にそれらのストレス・マーカーの値が増えることがわかった。ところが，30分後から60分後になると，今度はそれらが減少し，通訳者がいわゆる「虚脱（burnout）」の状態に陥ることも明らかになった。そして，その後長時間の通訳を続けることができた被験者はいなかった。

Moser-mercer, et al（1998）は，上記の通訳者たちを対象に心理学的な側面についてもアンケートによる調査を行っている。それによると，通訳を始めて最初の30分の間にストレスのレベルが増していき，30分を超えるころから，通訳業務に対してマイナスの影響が及ぶようになることが明らかになった。あまりにも負担が増えると，状況全体に対して「どうでもいい（I couldn't care less.）」という心理状態になり，自分の通訳プロダクトの質を十分評価することもできなくなり，作業を中断するチャンスがあっても「やめる」という判断もできなくなる傾向が出てくるという。

また，心理学的な側面からの研究としては，

Riccardi, et al.（1998）も挙げられる。この研究では，通訳を学ぶ学生30人とプロの会議通訳者15人を被験者として模擬会議で通訳させ，その開始前と終了後に，臨床的にも用いられている心理テストを用いて，ストレスの指標としての不安（anxiety）と憂鬱（depression）のレベルを測る実験を行った。結果，模擬会議開始前のほうが不安と憂鬱が高まる傾向が示されると同時に，学生に比べてプロの通訳者は会議の前後の不安と憂鬱のレベルの変化が少ないこともわかった。やはり，プロの通訳者は仕事で何が起きるか予想できるので，開始前のストレスは学生に比べると少ないということである。同様に学生とプロの比較を行ったKurz（2003）の実験でも，両者の間で脈拍数の差が歴然と表れている。やはりプロは状況にどう対処するかに長けており，ストレスにも対処しやすいということである。

また，通訳の質という点についても，上記のMoser-mercer, et al（1998）は，誤訳，省略，追加，文法的ミス，語彙選択の誤りなど，様々な指標によって通訳エラーを分析している。それによると，誤訳以外の要素は，時間経過とはあまり関係ないか，それほど顕著でない増減を示したが，誤訳に関しては，時間経過とともに，その数が確実に増えて行くことが観察された。つまり，長時間の通訳作業による疲労が，通訳の質という意味で非常に重大なエラーの１つである「誤訳」を引き起こしているということが明らかになったのである。

３．法廷通訳のストレスと疲労

前述した研究は，そのほとんどが主として同時通訳者を対象とするものである。法廷通訳についての同様の研究はないが，以下の理由で，そのような先行研究の結果の多くの部分が法廷通訳という状況にも当てはまると考えられる。

まず，通訳の形態であるが，法廷通訳が会議通訳（同時通訳）と大きく異なる点は，一部の手続きを除き，逐次で行われることである。聞きながら情報処理をして口に出して訳すという必要がないので，逐次通訳は同時通訳より楽であるというのが一般的に人が持つ印象であるが，水野（1994）は以下のように述べている。「逐次通訳では原スピーカーの発言がいったん終わったところで訳出が行われる。従って同時通訳のようにスピーカーの原発言の聴取と通訳者の発話が重複することはない。しかし，この時間的な分離が，通訳者を複数作業の同時進行から解放してくれるわけではない。」水野（1994）は，Gile（1995）のEffort Modelを引用し，逐次通訳の際のメモはスピーチ産出（production）の一種であり，メモ取りの段階とターゲット言語への訳出の段階の２回にわたって 産出が行われ，通訳メモは一種の同時的なプロトコールと考えることができるとしている。このように，逐次通訳も複数の作業が同時進行しており，ストレスや疲労のレベルが同時通訳の場合に比べて低いと断じることはできない。

Vidal（1997）は，会議通訳と法廷通訳を比較して，会議通訳者のほうが恵まれた状況にあり，ストレスが少ないとしている。ブースに入っているので音響的にも問題は少なく，１人の話者に集中していればよいし，話者の文体レベルに幅が少ない。さらに，法廷通訳は会議通訳のように訳出に柔軟性を持たせることができない。原発言内のためらい，言い直し，言い間違いなどの要素まで正確に訳出することが求められるので，法廷通訳は通訳の中でもっともストレスのかかるきつい仕事だとVidal（1997）は結論付けている。もちろん，法廷通訳と会議通訳とで，どちらがス

トレスがかかるかということを科学的に証明することは難しい。しかし，法廷通訳が逐次通訳を中心としているからというだけの理由で，会議通訳よりストレスや疲労が少ないと考える根拠にはならない。従って，これまでの同時通訳に関するストレスや疲労の研究から得られた結果は，法廷通訳という文脈においても大いに参考になると思われる。

４．模擬法廷による実験

著者らは日本学術振興会科学研究費補助金（詳細は本稿末尾参照）を受けており，その研究プロジェクトの一環として模擬法廷による実験を行ったが，実験のポイントの一つが通訳者の疲労やストレスと通訳プロダクトの質との関連を探ることであった。

4.1 模擬法廷の内容

以下の要領で模擬裁判を執り行った。

日　　程：2009年12月28日
１日かけて本物の裁判に非常に近い形で模擬裁判を行う。
同年12月29日
模擬法廷参加者によるフォローアップ・セッションを行う。

場　　所：甲南大学裁判員対応型法廷教室

シナリオ：2009年10月に大阪地裁で行われたポーランド人被告人の覚せい剤密輸事件の裁判をもとに作成した。

言　　語：参考にした事件はポーランド語の事件であったが，模擬裁判は日本語と英語で行った。

参 加 者：通訳人役……プロの会議通訳者（女性）　２名
裁判官，検察官，弁護人役……大阪弁護士会弁護士　各１名
被告人役の外国人……英語ネイティブ・スピーカーの男性　１名
証人役の外国人……英語ネイティブ・スピーカーの女性　１名
裁判員役……人材派遣業者に依頼して派遣してもらった一般人　８名（内２名は陪席判事の役）

なお，本研究では通訳者はきちんとした訓練を受けた中堅クラス以上のプロで，その質にばらつきがないことが重要な条件になった。そのため，上記を満たす人材として会議通訳者を選択した。今回の模擬法廷の通訳者の聞き取り調査によるプロフィールは以下である。

２名とも会議通訳者養成機関において２年程度の訓練を受けている。会議通訳者養成プログラムには通常法廷通訳訓練は含まれていないことから，この二人も特に法廷通訳の訓練は受けていない。プロとしてのキャリアはそれぞれ，10年，12年の経験を有しているとのことであり，その年数からは会議通訳者としては中堅の域をそろそろ過ぎようとしている通訳者であると言える。ただし，会議通訳者が一般にそうであるように，この２名もこの間法廷通訳を経験したことはないとのことであった。会議通訳者として普段はビジネス交渉，会議，表敬，アテンド，司会などの通訳業務をこなしているという。最近は同時通訳の依頼も少しずつ増えてきているとのことであった。プロの会議通訳者の世界は，実力を有する者しか生き残れない厳しい市場原理が働く世界であり，この両名が長期間市場で活躍してきたという事実は，信頼のおけるレベルの高い通訳者であることを証明するものである。

模擬裁判では，冒頭部分，つまり起訴状朗読と検察側と弁護側双方からの冒頭陳述部分は，同時的に通訳した。これは実際の裁判でワイヤレス・システムを用いて同時に通訳される慣行に従ったものである。さらに，このような原稿を読み上げることの多い場面にお

いては，通訳人に前もって原稿が渡されるのが一般的であるので，今回も通訳人役を担当した通訳者に事前に原稿を渡しておいた。なお，通訳者は休憩をはさむごとに２人で交代して通訳した。

模擬裁判は午前10時に開始され，休憩や中間評議，最終評議をはさみながら，午後4時半ごろに終了した。この間，通訳付きセッションの最長は被告人質問の場面の１時間弱で，最短は判決言い渡しの15分くらいであった。

4.2 分析の目的と方法

本研究では，通訳人の通訳エラーが時間の経過にともなってどのように変化するかを分析するが，疲労の蓄積によって生じやすいと思われるエラーとして①フィラー，②言い直し，③文法的ミス，④誤訳（訳し落しや追加も含める）を取り上げ，その分析の指標とする。これらが実際に疲労度と関連して出現するのかどうか，そして時間の経過に伴う通訳の質の劣化がどの程度のものなのかを知る事が目的である。

分析は以下の手順で行った。

1）模擬法廷の模様をＩＣレコーダーとビデオカメラで記録する。中間評議，最終評議の模様も同様に録音・録画する。
実験２日目のフォローアップ・セッションについても，参加者の全ての発言を録音する。

2）通訳がついた部分の音声を起こしたドラフトを作成する。この場合，あらゆる参加者の発言を，ポーズや言い淀みなども含め，すべて記録する。

3）前述した4つの指標ごとに，そして通訳人ごとに，10分間のコマ刻みでその出現の回数を記録し，セッションの間の休憩時の時間経過も含めてグラフにして，その特徴を明らかにする。１回の通訳付きセッションの時間の流れに沿ってと，模擬法廷全体の時間の流れに沿っての両方から，状況を分析する。
また，それぞれの指標の出現の仕方や質の変化についてもチェックしておく。
さらに，２日目のフォローアップ・セッションの際，前日の模擬法廷の録音を再生しながら，通訳人に，自身が行った通訳エラーについて，その時の状況を振り返って語ってもらったが，その内容についても分析の参考にする。

4.3 分析結果

以下，指標ごとの結果である。

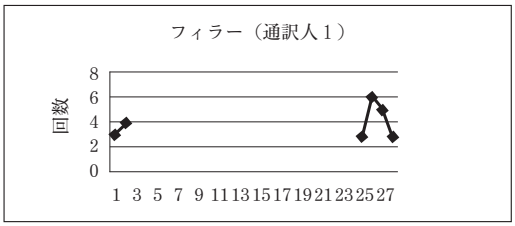
① フィラー

フィラーとは，発話の合間にはさみこむ意味のない言葉であり，「発話時に自分の考えがまとまっていなかったり，適当な表現が分からず，次の言葉が出てこない時の口ごもり現象（林，2008）」である「言い淀み」の一形態であるが，代表的なものとして「えー（と）」「あの（う）」がある。定延，田窪（1995）によると，「えー（と）」の機能は「演算領域確保」であり，何を言うべきかを考えている時に出現しやすい。「あの（う）」は「表現形式模索」の機能を持ち，どのように言うべきか考えている時に出ることが多い。したがって，通訳者の原発言に対する理解度と訳出の際の表現能力を評価する指標として有効だと思われる。

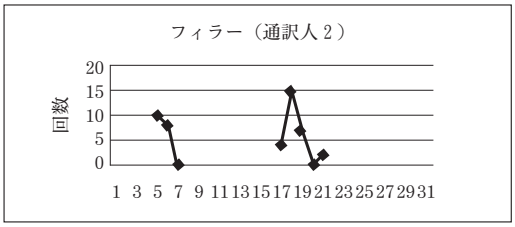
本模擬法廷の通訳では，英語から日本語，日本語から英語の2方向の通訳が行われたので，日本語の「えー（と）」「あの（う）」と，それに当たるものとしての英語の「uh」「ah」を取り上げて，それぞれの出現頻度が時間の経過に伴いどのように変化するかを分析した。

その結果，英語でのフィラーは，時間の経過とほぼ無関係に出現していることがわかったが，これは，通訳者が日本人であるため，自分の母語ではない英語を話す際に，その構文構築など，表現形式を模索するという意味でのフィラーであったからだと思われる。これに対し，日本語におけるフィラーは時間の経過とともに頻度に変化が表れ，ある程度疲労との関連性があるのではないかと思われた。したがって，ここでは日本語バージョンのみ指標として採用している。

（表１）（横軸は10分ごとのコマ番号）



（表２）（横軸は10分ごとのコマ番号）



結果としては，フィラーはどちらかと言えば，セッションごとに，通訳を始めた最初の20分ほどの間に高頻度で出現しており，その後減る傾向にあった。これは，通訳を始めるに当たり，最初の緊張感のためにそのような現象が起こったのではないかと推測される。前述したRiccardi, et al.（1998）によると，非常に経験豊富で能力のある通訳者ですら，通訳作業の開始時には，どのような専門用語が出てくるか，話者はどんなアクセントと発音なのかといった未知の要素が多いため，緊張するとしている。また，著者らが行った別の実験で，20分間連続して通訳者に逐次通訳をしてもらったことがあるが，その時のフォローアップ・セッションでの通訳者のコメントから，20分くらいでは疲労を感じず，逆に通訳に勢いがついてなめらかになるのが15分から20分後であるということがわかった。

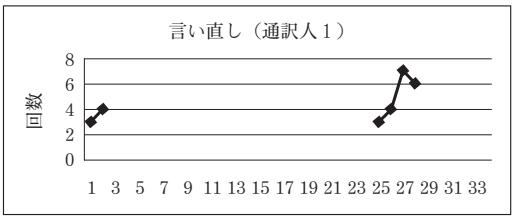
また，上記のようなフィラーは，時間の経過よりも誤訳箇所や難解な箇所と連動するケースが多く，上述した定延，田窪（1995）の定義に当てはめると，原発言の理解が十分でない場合，およびどのように通訳したらいいかわからない場合に出現するものであることがわかる。

上記から，フィラーについては，少なくとも今回の模擬裁判に関しては，通訳者の疲労の度合いとはそれほど関係がなく出現する要素であると考えられる。

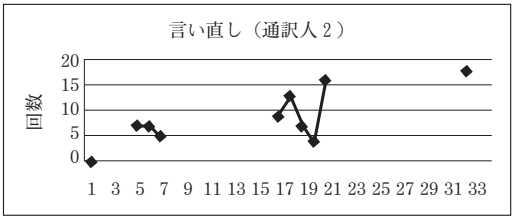
② 言い直し

言い直しについては，英語も日本語も，時間の経過とともに頻度に変化が現れたため，指標として有効であると判断した。

（表３）（横軸は10分ごとのコマ番号）



（表４）（横軸は10分ごとのコマ番号）



言い直しの回数にはかなりの増減があるが，

模擬裁判全体としては，時間の経過とともに増加する傾向があった。ただし１つのセッション内では30分経過くらいの時間になると，頻度が少し減るケースも見られた。これは，言い直し自体，正確性を求めるという認識の表れであり，疲れてくると，その気力がなくなることを示しているのではないかと思われる。このことは，前述したようにMoser-mercer, et al（1998)の通訳者の心理に関する部分で，「最初の30分で心理的なストレスが蓄積し，さらに負担が増えると，どうでもいい（I couldn't care less.）というような心的態度になってくる」という部分と呼応する。ただし，今回は，そのような状態になるほど長時間のセッションにはならなかったこともあり，それが特に顕著に表れたわけではない。

また，当然のことではあるが，言い直しが難解な箇所や誤訳箇所に連動して出現することも観察された。

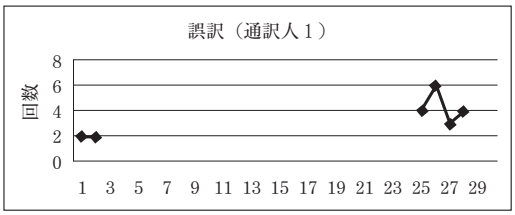
③　文法的ミス

今回の模擬法廷では，通訳者たちが日本語母語話者であったことから，その英語への通訳における文法的なミスについて，時間の経過とともに変化があるかどうか調べた。その結果，文法的ミスは通訳者によって間違えやすいパターンがあることがわかったが，時間の経過とは全く無関係に出現していた。つまり，文法ミスは元々の英語能力によるところが多く，疲労との因果関係を見出しにくいということである。

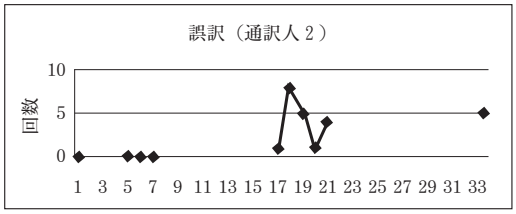
④　誤訳

通訳エラーのうち，誤った訳語を選択したり，内容を取り違えたり，訳し落したりしたものを「誤訳」として，時間の経過に伴い，それらがどう変化したかを分析した。

（表５）（横軸は10分ごとのコマ番号）



（表６）（横軸は10分ごとのコマ番号）



その結果，１日の裁判全体の流れをみると，最初のうちは誤訳はほとんどないのに，時間経過とともにその数が増加していく傾向があった。さらに，数の変化のグラフからは読み取れないが，その質に明らかな変化が見られることが観察された。初めのうちはちょっとしたニュアンスの違いがある程度であったが，徐々に訳し落しや原発言にないものの付け加えといったエラーが出始め，さらに時間が経過すると，文全体の誤訳が起こり，それに沈黙も加わるようになった。

先行研究から，長時間通訳していると通訳プロダクトの劣化に気づかなくなるという現象が明らかになっていたが，本模擬法廷でも，連続して30分近く通訳したころから，以下のように非常に単純な訳語選択におけるミスが起こり始めていた。これについては，通訳者自身，フォローアップ・セッションの時に初めて間違えていたことに気づき，驚いていた。

訳語選択ミスの例

「誓う」→confess（告白する）

「拒絶する」→deny（否定する）

「休廷」→recession（景気後退）

また，長時間通訳した後の通訳プロダクト劣化の例として以下を挙げるが，これは１つのセッション内で通訳開始後46分経過した時のものである。

検察官：捜査のときに，刑事と一緒に枚数を確認しましたね。

通訳人：When you were being uh… asked by the… （短い沈黙）the… police officer, detective, that you … you… confirmed the photos along with the … the… detective, is that correct?

ここでは，「刑事」［捜査」などの基本語がスムーズに出ないし，構文もまとまらなくなって，沈黙も加わっている。これ以上長く続けると通訳が機能しなくなることを示す１つの前兆とも言えるパフォーマンスであった。実際の模擬裁判では，ここで裁判官が通訳者に対し，休憩が必要かどうか尋ねる質問をしている。

このように，誤訳は疲労と通訳プロダクトの質との関係を示すのに非常に有効な指標となる事がわかったが，前述したように，Moser-mercer, et al（1998）の実験からもこれと同様の結果が得られ，長時間の経過による疲労が誤訳を引き起こしていることが明らかになっている。

分析のまとめとして，以下のことが言える。今回の模擬裁判に関しては，使用した４つの指標のうち，疲労と関係があるのは「言い直し」と「誤訳」であった。これらは時間の経過とともに増加して行く傾向にあった。特に「誤訳」は，時間経過とともに，その質という点でより重大にものになって行った。また，各セッション内でのコマ刻みの増減という点では，あまりはっきりした増加傾向が見られなかったのに対して，１日の裁判という流れを考えた場合，時間経過とともに，その増加は顕著であった。これに関して，今回の模擬法廷では２名の通訳人が交代で通訳したが，通訳をペアで行う場合，自分が通訳していない時でも集中して聞いているため，継続的に疲労とストレスにさらされていたことを補足しておく。

4-4 問題点

模擬法廷の実験に関しての問題点は，シナリオの都合上，同時通訳の実験のように，均質の内容を延々と長時間にわたって訳すという状況を作ることができないことである。

例えば，法廷では場面ごとに切っていくので，１回のセッションの通訳継続時間が限られてくる。今回の模擬法廷でも，１時間近く連続した場面は１回のみであった。そのため，文字通り長時間連続して通訳した場合の疲労と通訳プロダクトの関係についての分析が十分できなかった。

また，法廷という場面では，内容的に非常にやさしい部分と難しい部分があり，その差が大きい。例えば，通訳人２の17コマ目から18コマ目の時間帯は，被告人の発話が長く内容的にも複雑な箇所に当たったため，その部分が他よりも言い直しや誤訳の数が多くなっている。つまり，難易度と疲労度という２つの要素が絡んでくるので，その分，分析結果がはっきり出にくいという難点がある。

4-5 通訳者からのコメント

模擬裁判終了後に通訳者２名に対してフォローアップ調査を行った。その中で，今回の模擬裁判の通訳中に感じた疲労について尋ねた。途中で疲れたと感じたかという質問には

両名とも，ある時点で「疲れた」と感じ始めたと答えている。一人は，「冒頭陳述を一人で訳し終えた頃，すなわち30分程度が経過した時点で集中力が途切れ始め，『疲れてきたのかな』と感じ始めた」と述べた。筆者らの観察では，通訳者の顔が赤らんできたことが見て取れたのがちょうどその頃であったことから，何か異変が起きつつあったのかもしれない。

疲れてくると通訳パフォーマンスに影響があるのかどうかについては，両名とも，自分でもはっきり分かる影響があったと述べた。例えば，「単語が出てこない」，「理解したことや言おうとしたことと違うことを言ってしまう」，「数字，人名を間違える」「時制を言い間違える」などの状態になったとのことであった。

次に，疲れていても通訳を続けなければならない状況でどんな気持ちになったかを尋ねた。２名からは，「何度も同じことを繰り返し聞かれ心理的に自分が責められているような気分になった」，「精神的に負担を感じるようになった」，「だんだんうっとうしい気分になった」，「頭がブランクになって何も考えることができなくなった」など，心理的に過酷な状況におかれていたことが窺われる。

それでは，どのようにすれば過度の疲労を回避できると思うかと尋ねると，両名とも口を揃えて，「長い陳述は，裁判長が『そこまで訳して下さい。』のように途中で遮ってくれると助かる」，「会議通訳時のように，2名の通訳者が協力して誤訳や訳漏れを防ぐ体制だと助かる」などの意見を口にした。

５．結論

先行研究および模擬法廷による実験結果から，以下のことが言える。

生理学的にも心理的にも時間の経過とともに，通訳者のストレスが増していく。通訳開始後30分くらい経つと，ストレスの蓄積は限界に達し，心理的に虚脱状態に陥り，生理学的ストレス・マーカーの数値が逆に下がり始めるようにもなる。このように，通訳者が生理的および心理的に限界に達するのは平均30分前後であり，その限界を超えると通訳プロダクトに劣化が見られるようになる。このことは先行研究から明らかになっているが，今回の模擬法廷での実験によって，この疲労と通訳プロダクトの劣化との関係が法廷通訳にも当てはまることがわかった。さらに，誤訳の数の増加だけでなく，その質の変化によって疲労が通訳プロダクトに与える影響が顕著に示された。

また，先行研究は，30分を超えてさらに通訳作業を続けると，通訳者は心理的に「やる気」を失い，正確性を保つための努力も限界に達し，通訳者は自分自身の通訳プロダクトの質を十分評価することもできなくなり，通訳を中断する必要がある場合でも，それを自覚しないケースも出てくるということを明らかにしているが，今回の模擬法廷でも，長時間の連続通訳が，通訳者の心理にそのような影響を及ぼすことが示された。また，たとえ休憩を入れても，１日の裁判という時間の流れを考えた場合，徐々に疲労は蓄積していき，完全にリセットできないということもわかった。

Vidal（1997）は，「司法手続きにおいて正確な通訳を保証する唯一の方法は，約30分ごとに通訳者に十分な休憩を取らせることである」と述べているが，長い時間の経過ということを考慮に入れると，いくら休憩を入れても，通訳の１人体制では無理がある。このことは現在，日本の裁判関係者にはほとんど認識されていないようである。長時間の通訳は，確実に正確性を損なうものであるという事実

を，経験論としてだけでなく，科学的根拠に基づいて積極的に提示していくことが，今後の研究者の務めであろう。

裁判員裁判という一般市民が参加する状況では，要通訳裁判における通訳の正確性は従来型の裁判以上に重要である。正確な情報の提供がないまま，あるいは間違った情報が与えられたうえで市民に判断が委ねられれば，市民参加という理念が根底から揺らぐことになる。このようなことにならないよう，通訳の質の問題にはしっかり取り組んで行く必要がある。そういう意味でも，通訳人の人数や交代方法，休憩の取り方などについて，最も有効な体制を確立していくことが，重要かつ緊急の課題である。

＊本研究は，日本学術振興会科学研究費補助金（課題名：「裁判員裁判における言語使用と判断への影響の学融的研究」［新学術領域研究］，課題番号：21200046，代表者：堀田秀吾［明治大学］）を受けている。

［参考文献］

Gile, Daniel (1995) *Basic Concept and Models for Interpreter and Translator Training*. Amsterdam: John Benjamins

Hyona, J., Tommola, J., Alaja, AM (1995) 'Pupil Dilation as a Measure of Processing Load in Simultaneous Interpretation and other language Tasks' *The Quarterly journal of Experimental Psychology Section A, Vol. 48*

Kurz, Ingrid (2003), 'Physiological Stress during Simultaneous Interpreting: A Comparison of Experts and Novices' *The Interpreters' Newsletter 12,* 51－67

Moser-mercer, Barbara., Kunzli, Alexander., Korac, Maria (1998) 'Prolonged turns in interpreting: Effects on quality, physiological and psychological stress (Pilot study) *Interpreting Vol. 3(1)*, 47-64

Riccardi, Alessandra., Marinuzzi, Guido & Zecchin, Stefano (1998), 'Interpretation and stress', in *The Interpreters' Newsletter*, No. 8, pp. 93-106.

Vidal, Milta (1997) 'New Study on Fatigue Confirms Need for Working in Teams', *Proteus Vol. VI, No.1*

定延利之，田窪行則 (1995)「談話における心的操作モニター機構」『言語研究』108，74－93

林宅男編『談話分析のアプローチ』(2008) 研究社

水野的 (1994)「逐次通訳の理論のために」『通訳理論研究』Vol.6，No.2，16－26